



MOBILE SUIT
MSM-03

GOGGG

PRINCIPALITY OF ZEON MASS PRODUCTIVE
AMPHIBIOUS MOBILE SUIT



MG
MASTER GRADE

ジオン公国軍
量産型水陸両用モビルスーツ
MSM-03「ゴッグ」
1/100スケール マスターグレードモデル

MSM-03 GOGGG
PRINCIPALITY OF ZEON MASS PRODUCTIVE AMPHIBIOUS MOBILE SUIT

MG
MASTER GRADE

ジオン公国軍
量産型水陸両用モビルスーツ
MSM-03「ゴッグ」
1/100スケール マスターグレードモデル

BANDAI 2003 MADE IN JAPAN

0119253



MSM-03 GOGG

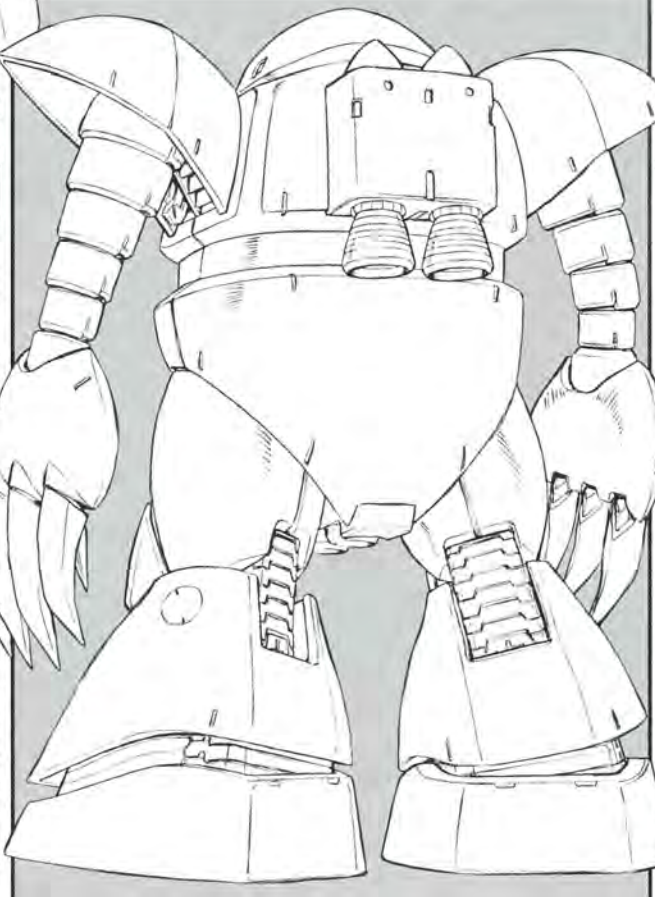
公国軍における水陸両用MSの開発は、U.C.0079年2月の“地球優攻作戦”の決定を待って着手された。初期の計画は06系の機体を改修して運用するというものだったが、通常のザク（MS-06Fまたは06Cと言われる）の各部に水密処理など各種改修を施したMS-06Mザクマリタイプは耐圧性能や装甲形状などの要素から、実戦に堪え得るものではなかったため、全く新たな観点から水陸両用MSが開発されることとなり、MSMというカテゴリーが作られた。同時に06MはMSM-01と改称され、水密構造や稼働部分に使用する部材などのテストヘッドとして使用されることとなった。

MSM-03ゴッグは、公国軍が初めて量産化に成功した水陸両用MSである。後の機体群と比較すれば決して高性能とは言えないが、水中でも陸上でも運用可能なMSが量産可能であることを実証した先駆けであることは紛れもない事実であり、その意味で非常に画期的な機体であるということが出来るだろう。特にゴッグは標準的な機体と比べ、単純計算で2~3倍のジェネレーター出力を持っており、公国軍においてビーム兵器を標準装備として搭載する最初期の機体であることも忘れてはならない。これは、水冷構造などを取り入れた新たな冷却システムが開発されたことによって可能となったものだが、公国軍におけるMSへのビーム兵器搭載は、連邦軍のようなCAP技術の開発によらず、ジェネレーター直結構造の小型化という形で推進されたのである。それに伴う開発、製造に関するノウハウの蓄積こそが、公国軍におけるビーム兵器の小型化技術の進展に大いに寄与したであろうことは想像に難くない。無論、続く水陸両用MS群の充実も、いわんや豊富なバリエーションもゴッグあればこそなのである。

開発当初、ゴッグは、後にズゴックと呼ばれるMIP（エム・イー・ペー）社製の機体および、ザクをベースとするZEONIC（ジオニック）社製のMSM-02

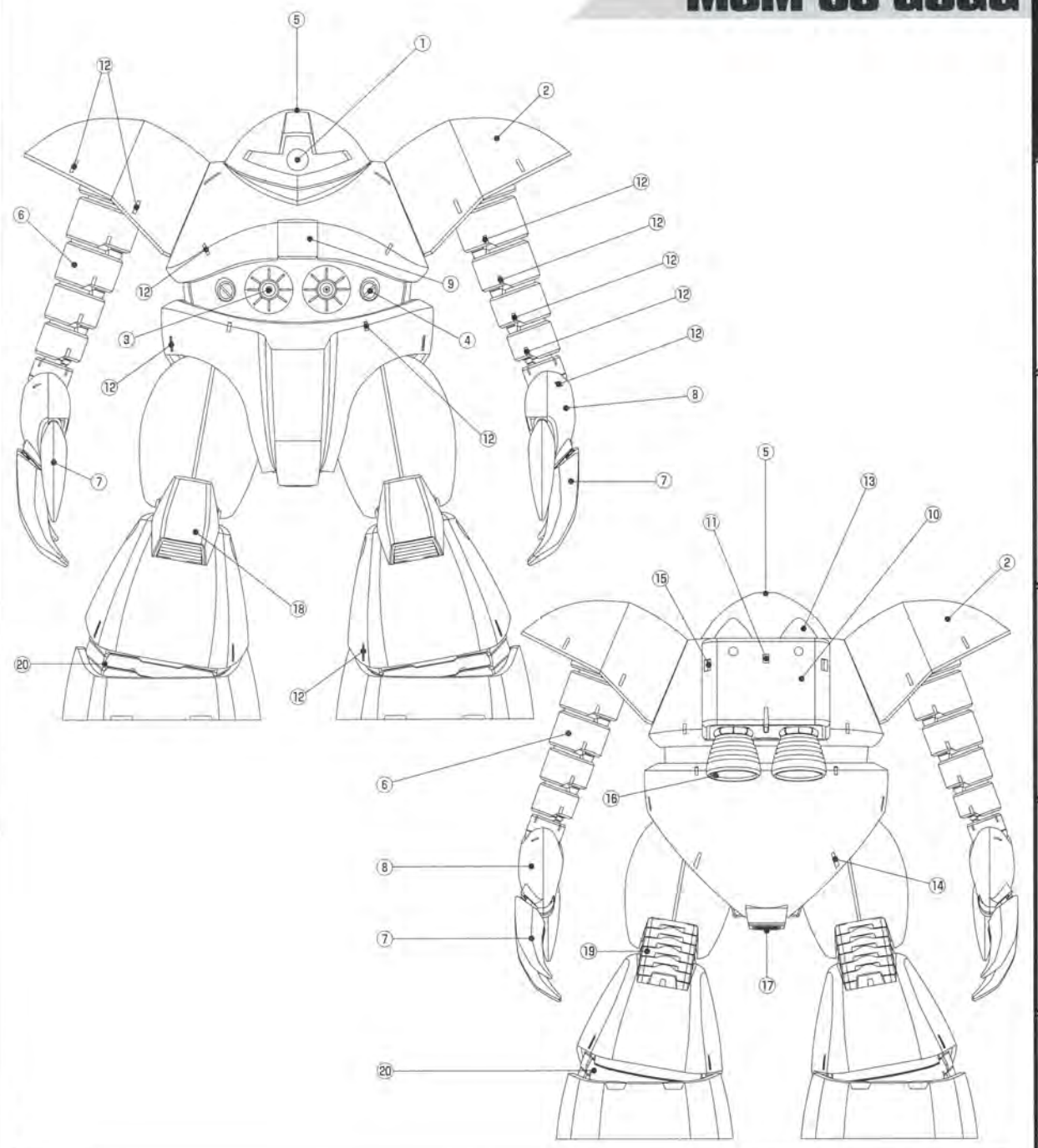
水中実験機などとジオン本国において競作された上で制式採用されたと言われているが、その時の機体は、腕部などの構造が異なるMSM-03-1プロトタイプ・ゴッグと呼ばれる機体だとする説もあり、詳細は不明である。ゴッグを開発したZIMMAD（ツィマッド）社は、ドムのホバー機能で知られるように、流体推進装置や流体制御技術を得意分野のひとつとしており、ゴッグのいち早い実用化、量産化においてもそれが反映されたと言えるだろう。この機体は早々に実戦投入され、地球各地で戦果をあげた。もともと公国軍は海上戦力において絶対的に不利であったはずだが、海中から陸上まで連続的に運用可能な兵器そのものが空前のものであったため、連邦軍はその対応が遅れた。単純に言えば、メガ粒子砲の自走砲台が突如として海から上陸してくる訳で、その意味では防衛のしようがない兵器だったと言えるだろう。ゴッグの水中における最高速度は70kt（ノット=時速約130km）であり、航続距離も非常に長い。つまり、電撃的な上陸作戦が可能である上、そのまま掃射も可能だったのだ。この行動半径の広大さは、それまでのMSにはなかった特性である。無論、上陸後のゴッグが陸戦兵器としても高性能だったわけではないが、実際の港湾施設や揚陸作戦の陽動などにおいて通常兵器に対し絶大な威力を発揮したのである。ただし、投入が急がれたため、生産された時期によって機体の仕様に若干の違いがあり、前期型や後期型といった分類が施され、後に開発された他機種との性能差の改善や機能向上が計られている。また、同機はMSM-07ズゴックとのフォーメーションが非常に有効であるという経験則から、戦争末期には、統合整備計画に基いて設計を全面的に見直したMSM-03Cハイゴッグなども同系機のカテゴリーで開発されている。

水陸両用MSの生産は主にカリフォルニア・ベースにおいて行われており、連邦軍の勢力圏内にある港湾施設の破壊や制圧、海上輸送路の寸断にも威力を発揮した。機体の多くは各地の潜水艦隊に配備され、強襲作戦や上陸作戦においても多大な戦果をあげている。また、ジャブロー攻略戦における隠密施設の発見や哨戒などにおいても水陸両用MSの果たした役割は大きく、公国軍が制圧地域の支配を維持できたのも、これらの機体による功績とされている。航空戦力を大幅に損耗した連邦軍は、部隊の移動や兵站のため陸路か海路を多用するしかなかったのだが、それを水際で食い止めていたのが公国軍の水陸両用MSだったのである。



Conceptual illustration : Katoki Hajime

MSM-03 GOGG



- | | | | |
|--------------|------------------|---------------|----------------------|
| ① メインカメラ | ⑥ フレキシブル・ペロウズ・リム | ⑪ リアセンサー | ⑯ バーニアスラスタ |
| ② ショルダーアーマー | ⑦ アイアンネイル | ⑫ フリュイドセンサー | ⑰ インサイドレッグスラスタ |
| ③ 拡散メガ粒子砲 | ⑧ パームユニット | ⑬ アヘッドセンサーアレイ | ⑱ ニーアーマー/ダクト |
| ④ 魚雷発射管 | ⑨ コクピットハッチ | ⑭ アバフトセンサー | ⑲ フレキシブル・ニージョイントアーマー |
| ⑤ マルチプルランチャー | ⑩ バックパック | ⑮ テンポラリーラッチ | ⑳ フレキシブル・アングルアーマー |

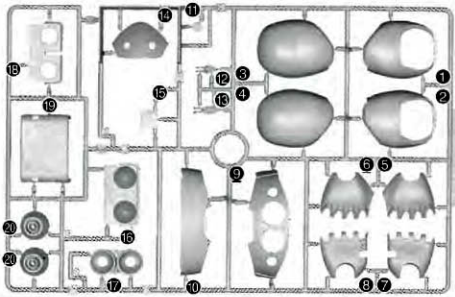
※アバフト=船尾、アヘッド=艦の前方（艦船用語） ※フリュイド=流体

注) この機体は、カリフォルニア・ベースのZIMMAD工廠において生産された、いわゆる“後期型”と呼ばれる仕様の機体である。洋上や沿岸部の連邦軍施設や船舶、輸送機などに甚大な被害を与え、公国軍の海上戦力構築に貢献した。水陸両用MSは、この機体の運用を通じた試行錯誤により完成できたと言われている。

Parts Name
Parts List
Head Unit
Body Unit
Arm Unit
Leg Unit
Final Assembly

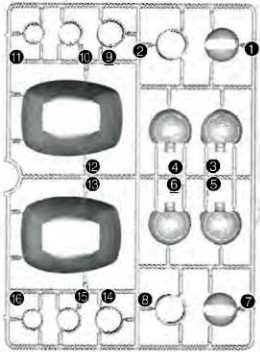
パーツリスト

Aパーツ (スチロール樹脂: PS)

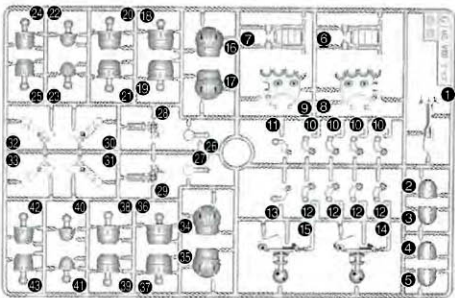


D1パーツ

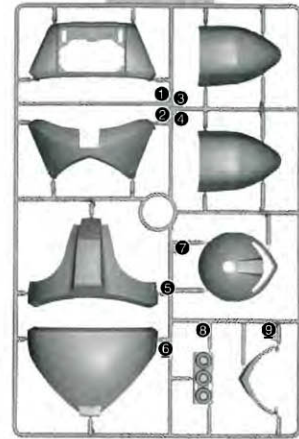
(スチロール樹脂: PS)



Gパーツ (ABS樹脂: ABS)

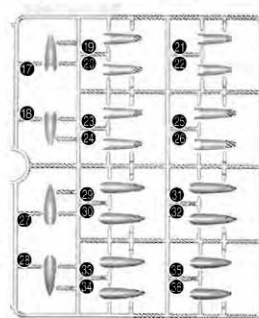


Bパーツ (スチロール樹脂: PS)



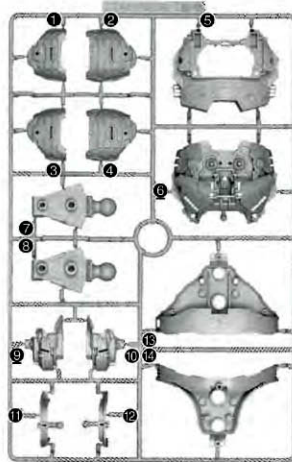
D2パーツ

(スチロール樹脂: PS)



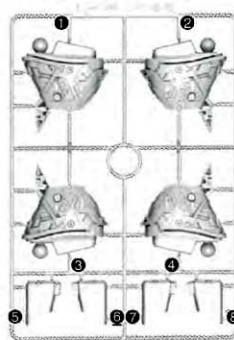
Eパーツ

(スチロール樹脂: PS)



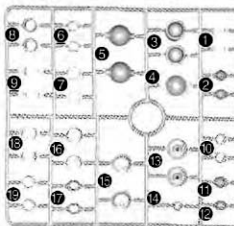
Fパーツ

(スチロール樹脂: PS)

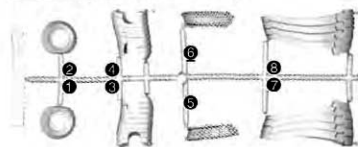


Iパーツ

(ポリエチレン: PE)

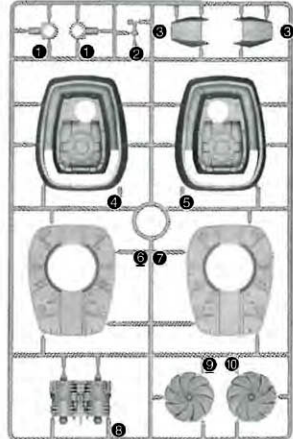


Hパーツ (合成ゴム: TPE)



マーキングシール..... 1枚
ガンダムデカール..... 1枚
スプリング..... 1本

Cパーツ (スチロール樹脂: PS)



注意

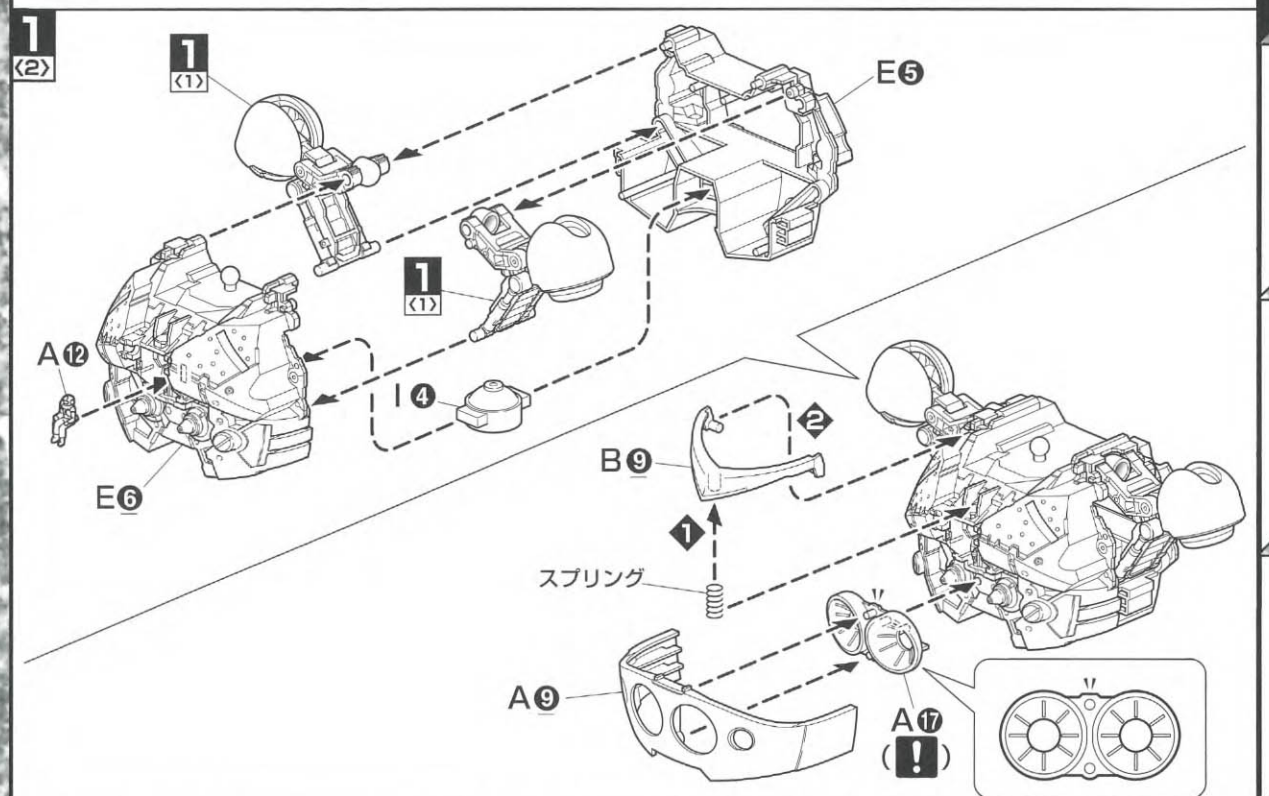
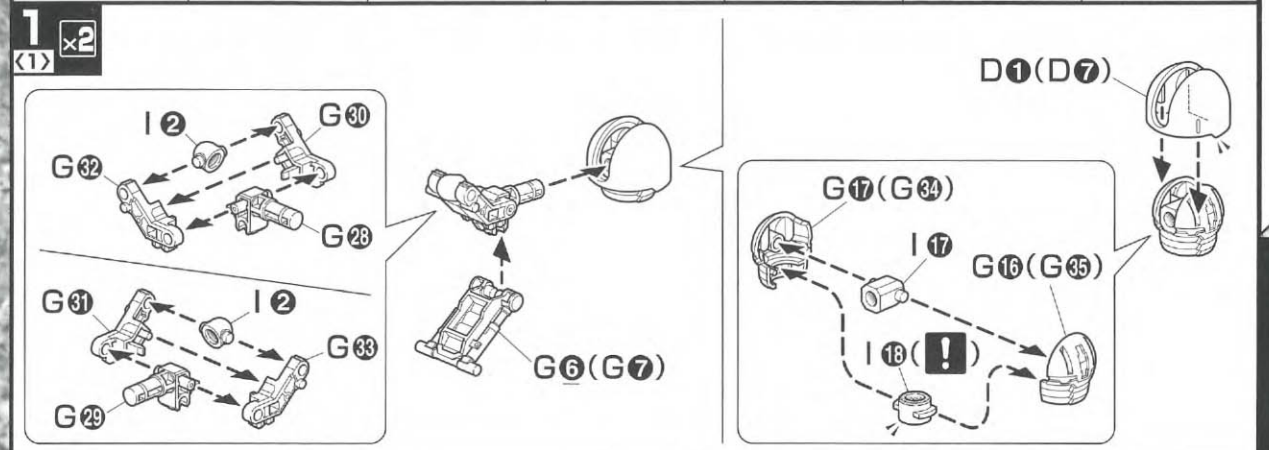
お買い上げのお客様へ 必ずお読みください。

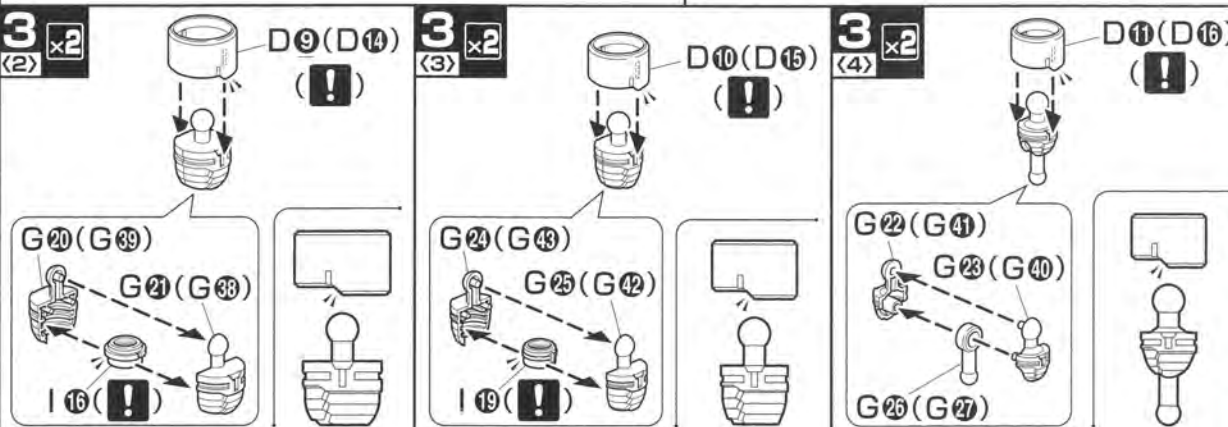
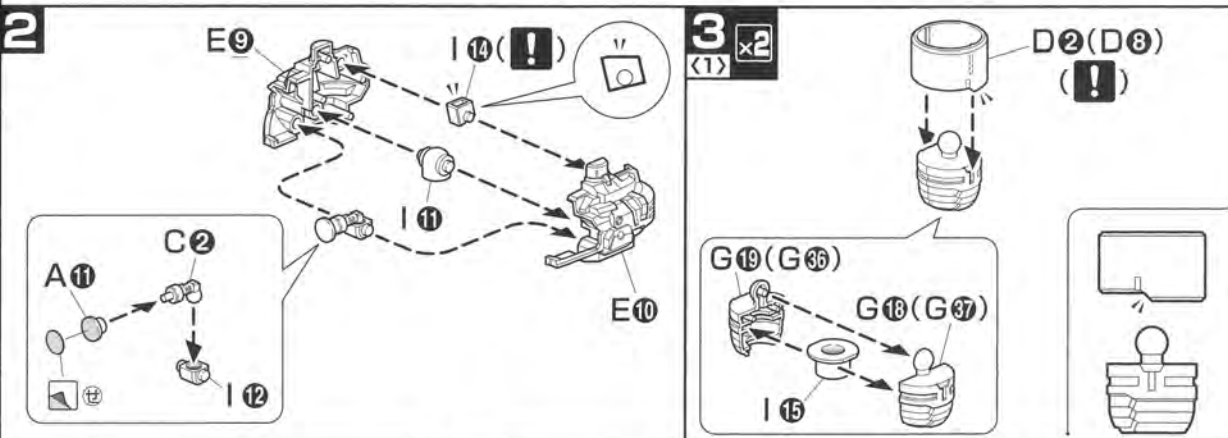
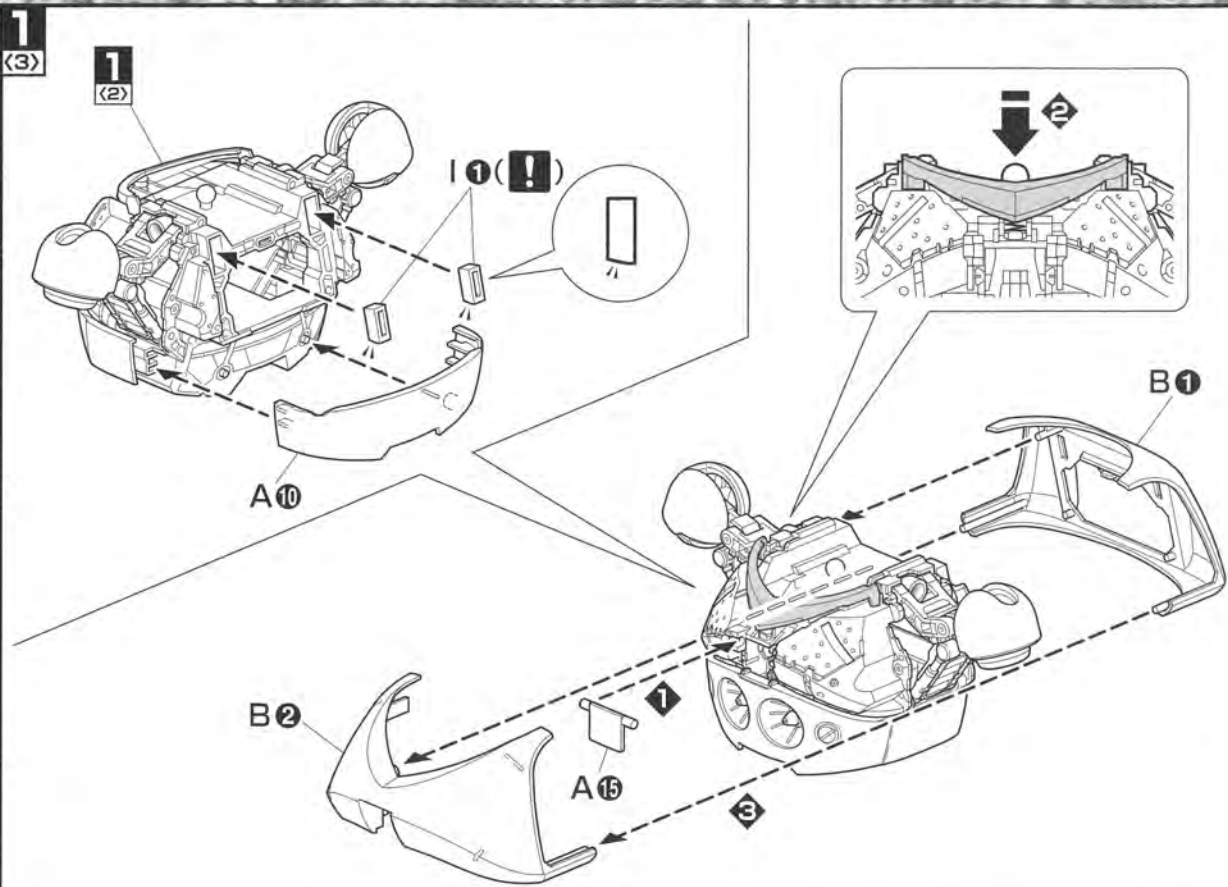
- 本商品の対象年齢は15才以上です。対象年齢未満のお子様には絶対に与えないでください。
- 小さな部品がありますので、小さなお子様が誤って飲み込まないように注意してください。窒息などの危険があります。
- ビニール袋を頭からかぶったり、顔を覆ったりしないでください。窒息する恐れがあります。
- 尖った部分や鋭い部分がありますので、取り扱いや保管場所に注意してください。思わぬケガをする恐れがあります。

組み立てる時の注意

- 組み立てる前に説明書をよく読みましょう。
- 部品は番号を確かめ、ニッパーなどできれいに切り取りましょう。
- 部品の加工の際の刃物、工具、塗料、接着剤などのご使用にあたっては、それぞれの取扱説明書をよく読んで正しく使用してください。
- 塗装には、より安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。
- 尖った先端や薄い縁端部に触れながらの組み立てには十分ご注意ください。
- ABS部分への塗装は破損する恐れがありますので、塗装はおすすめできません。

接着をするところの線	シールの番号	デカールの番号	反対側に取り付けるパーツ	両側に同じパーツを取り付ける	向きに注意して取り付ける	ビスの締めすぎに注意
切り取るところ	部品を数値の個数作ります	先に組み立てます	後に組み立てます	数値に合わせて回転させます	どちらかを選んで取り付ける	反対側も同じように動かします



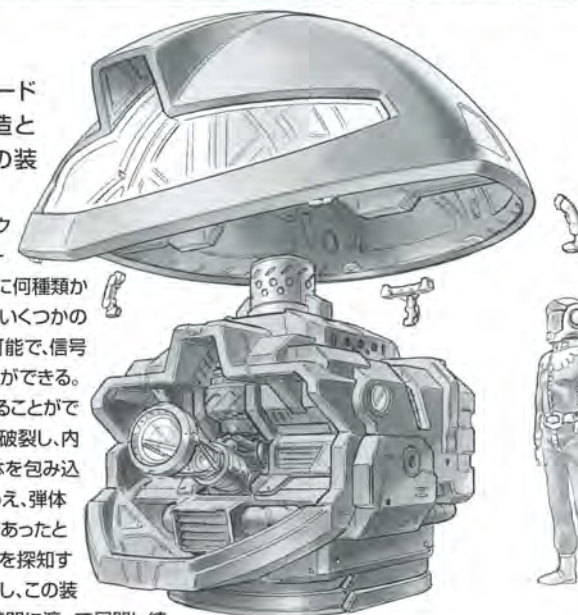


HEAD UNIT

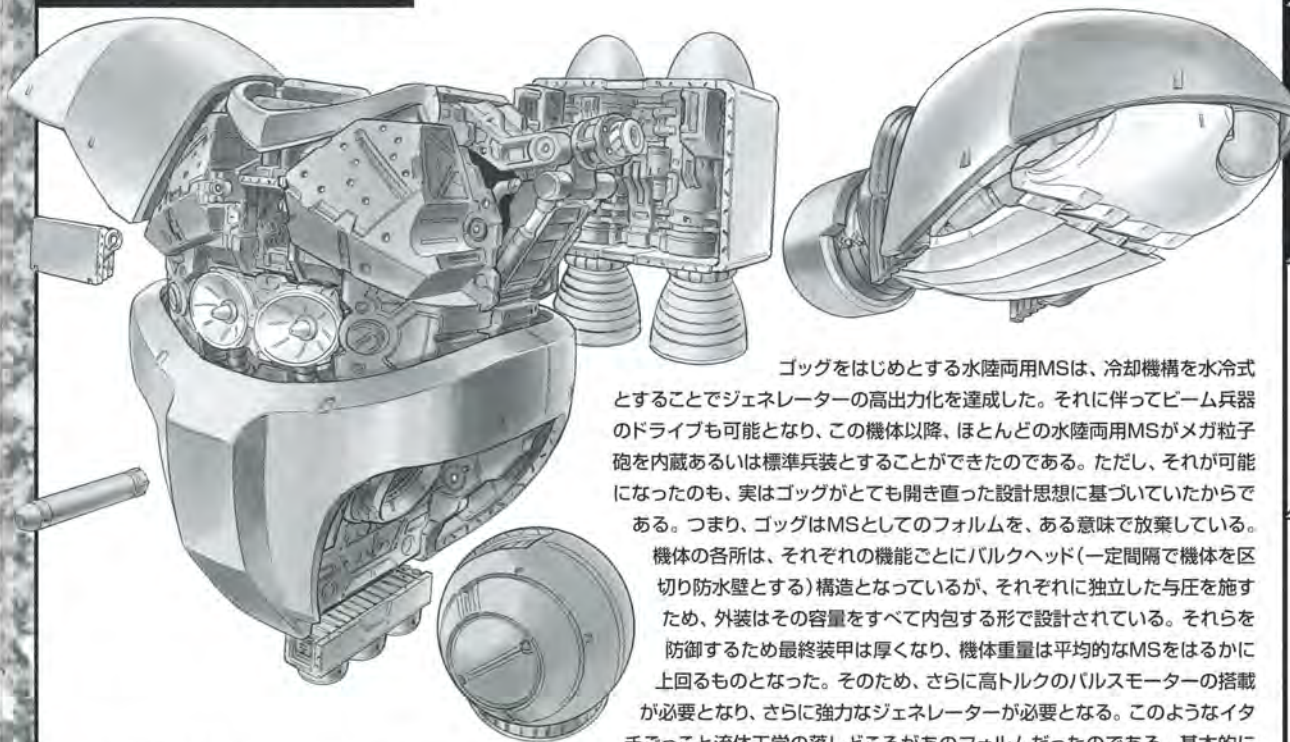
ゴッグのヘッドユニットは、モノアイおよびフリージャーードなどを射出するマルチプルランチャーを中心とした水密構造となっており、MSとしての必要最低限の機能のほか、潜航用の装備がいくつか追加されている。

ゴッグの頭部ユニットは、基本的にザクと同等の機能を果たす程度のスペックしか求められていなかったため、モノアイと航行のために最低限必要なソナー類およびマルチプルランチャー以外は装備されていない。ただし、他の機体用に何種類かの装備を試験的に搭載した機体などもあったようで、前期型、後期型を問わず、いくつかの仕様違いもあったと言われている。マルチプルランチャーは水中での射出も可能で、信号弾や照明弾などの他、フリージャーードと呼ばれる特殊な榴弾を射出することができる。

フリージャーードとは、敵の探知波や機雷などの索敵、掃討設備を無効化することができる特殊装備である。射出されたフリージャーードは、機体の進行方向前方で破裂し、内蔵された特殊な液体が海水や真水と反応してゲル状のシールドを形成し、機体を包み込むように展開する。これによって、機雷や爆雷などの爆発を防ぐことができるうえ、弾体そのものを絡め取る。接触式の機雷のほか、磁気感应式の信管などにも有効であったと言われている。また、機体表面をゲル状の物質がコーティングするため、反射音を探知するようなアクティブセンサーサイトをかいくぐることも可能であったようだ。ただし、この装備を使用する際には取水口にゲルが侵入しないよう塞ぐ必要があるため、長時間に渡って展開し続けることはできず、また、絡めとった機雷なども早めに投棄するほうが賢明であり、使用できる時間は非常に短かったようだ。



BODY UNIT



ゴッグをはじめとする水陸両用MSは、冷却機構を水冷式とすることでジェネレーターの高出力化を達成した。それに伴ってビーム兵器のドライブも可能となり、この機体以降、ほとんどの水陸両用MSがメガ粒子砲を内蔵あるいは標準兵装とすることができたのである。ただし、それが可能になったのも、実はゴッグがとてもし開き直った設計思想に基づいていたからである。つまり、ゴッグはMSとしてのフォルムを、ある意味で放棄している。

機体の各所は、それぞれの機能ごとにバルクヘッド(一定間隔で機体を区切り防水壁とする)構造となっているが、それぞれに独立した与圧を施すため、外装はその容量をすべて内包する形で設計されている。それらを防御するため最終装甲は厚くなり、機体重量は平均的なMSをはるかに上回るものとなった。そのため、さらに高トルクのハルスモーターの搭載が必要となり、さらに強力なジェネレーターが必要となる。このようなイタチごっこと流体工学の落としどころがあつたフォルムだったのである。基本的に

ゴッグのボディユニットは、水陸両用MSとしての機能が整理される以前の構造のまま生産が続けられた。つまり、通常のMSとして必要な部品と、潜航艇として必要な装備の双方をそのまま持っているのである。このことが、逆にテストヘッドとして膨大なデータを生み出したのである。

ゴッグのボディ容量はザクのそれに数倍し、例えば各部の断面積でザクより狭い所はひとつもない。これらのすべてが“水中用”であることを前提に盛り込まれていった。とにかく、水面下であれば機体の比重は軽くなる。ならば、陸上での機能が多少限定されようとも、水陸両用という環境に適応したスペックさえ達成できれば充分だという考え方である。ともあれゴッグは、水冷構造の採用によって、かねて懸念のビーム兵器の搭載が可能となったばかりか、ザクを上回る臂力と脚力を手に入れた。それは苦肉の策ではあつたものの、要求スペックを満たし、MSの新たな地平を開拓したという意味において特筆されるべきだろう。



LANDING OPERATIONS

ベルファスト基地めがけ、ユーコンから隔動のミサイルが飛来する。基地は混乱に陥り、ガンダムが迎撃のため出撃する。その混乱をよそに、ラサのゴッグは別方向からやすやすと上陸を果たす。「よし、うまくいった」同じく上陸したマーシーのゴッグは、防衛用のミサイルランチャーを潰しながら木馬のいるドックを目指す。迎撃のために出撃してきた連邦軍の戦闘車両めがけ、ラサたちのゴッグはビームを放つ。次から次へと吹き飛ばす戦車や大口径バルカン重装甲車を蹴散らしながら進撃する二機のゴッグ。「このゴッグの装甲が、バルカンくらいでやられると思ってるのかよ!」と、そこにアムロのガンダムが立ち上がった。「あれも新型のMSか! ザクやグフとは違うようだが……」「出てきたな! MSめ」マーシーのゴッグはガンダムを狙ってビームを放つ! しかし間一髪、箭地と同時にビームをかわしたアムロは、小手調べにバルカン砲でゴッグを撃つ!



ACTION POSE | INNER FRAME



UNDERWATER CRUISE

U.C.0079年11月。オデッサの激戦による傷を癒すため、ホワイトベースは北アイルランドの連邦軍ベルファスト基地へと向かった。スパイから盗竊不明の新型艦が入港したとの報を受けたシャアは、この艦が宿敵の木馬であると確信し、ユーコン艦長のフランガン・ブーンに申し送ると共に、自らもマッド・アングラー隊を率いてベルファスト基地を目指す。一方、先行するユーコン隊から出撃したラサのゴッグは、港の寸前で機雷に接触して誤爆してしまうのだが、ゴッグの装甲はびくともしなかった。「さすがゴッグだ。なんともないぜ!」用心のためフリージャーードを展開し、港内へと侵入するゴッグ。ベルファスト基地も機雷の反応が消えたことを察知して警戒体制に移行するが……



THE HAMMER WAS CAUGHT!

「なんてMSだ。バルカンをまったく受け付けられないのか!」ゴッグの装甲の強さに驚きながらも、アムロはパワーアップしたハイパーハンマーのチェーンを握りしめ、ゴッグを狙って振りかぶる。「この動きなら!」ロケットを噴射して加速しながらゴッグ目がけ真一文字にハンマーが翔ぶ。轟音と共にゴッグが倒れ込む。しかし、たいしたダメージもなかったようで、瞬く間におくりと起き上がる。「やったなアツ、ガンダムっての!」再びゴッグにハンマーが迫る。ところがゴッグは、その両腕でハンマーを受け止めた。「ふひふひ、馬力ならこのゴッグも負けんぜ!」なんて奴だ。このハンマーだってパワーアップしてるのに!」ハンマーをつかんだまま、ゴッグはチェーンごとガンダムをぐいと引き寄せた!

PAINTING

※よりリアルに仕上げたい場合は、下の基本色をご覧ください。
※顔面には、より安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。
●このキットをよりリアルに塗装したい方は、(株)GSIクレオスより発売のガンダムカラー(「ゴッグ」用、その他カラーセット)をお使いください。
●ABS樹脂部分への塗装は破損する恐れがありますので、塗装はお控えください。

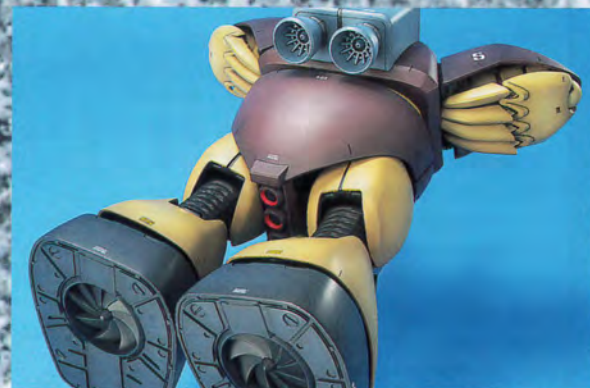
- | | |
|---|---|
| ●本体ダークイエロ部の塗装色。
サンディイエロー(70%)
+ホワイト(30%)
+ブラック(少量)
※またはガンダムカラー オーカー2 | ●メガ粒子砲イエロ部の塗装色。
ホワイト(70%)
+クリームイエロー(30%) |
| ●本体ブラウン部の塗装色。
レッドブラウン(50%)
+ホワイト(30%)
+ブラック(10%)
+レッド(10%)
※またはガンダムカラー ブラウン1 | ●ヒザ等ダークグレー部の塗装色。
ダークグレー(70%)
+ホワイト(30%)
※またはガンダムカラー グレー5 |
| ●バックパック
ブルーグレー部の塗装色。
エアクラフトグレー(60%)
+ミディウムブルー(40%) | ●内部メカ等ダークグレー部の
塗装色。
ミッドナイトブルー(100%) |
| ●メガ粒子砲レッド部の塗装色。
モンザレッド(100%) | ●メインカメラピンク部の塗装色。
蛍光ピンク(100%) |



FRONT VIEW



REAR VIEW



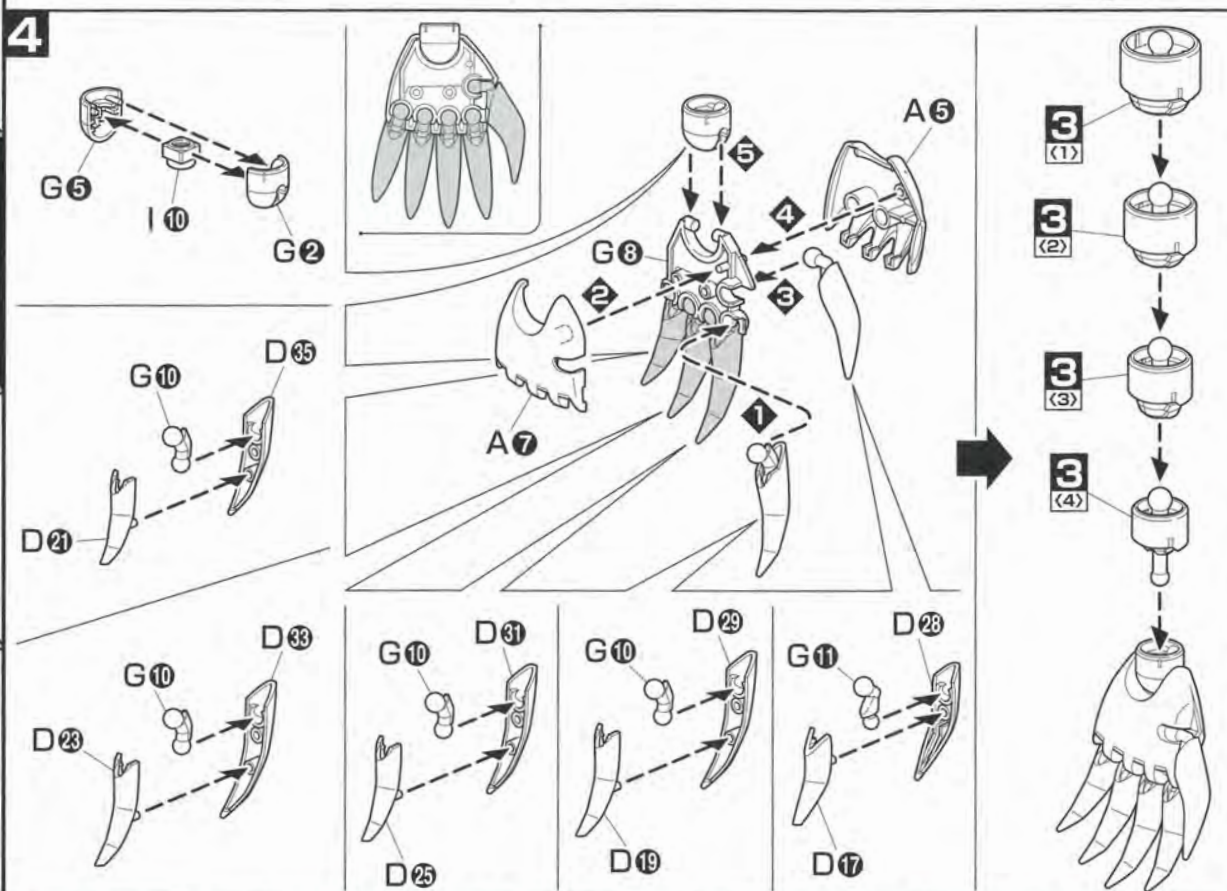
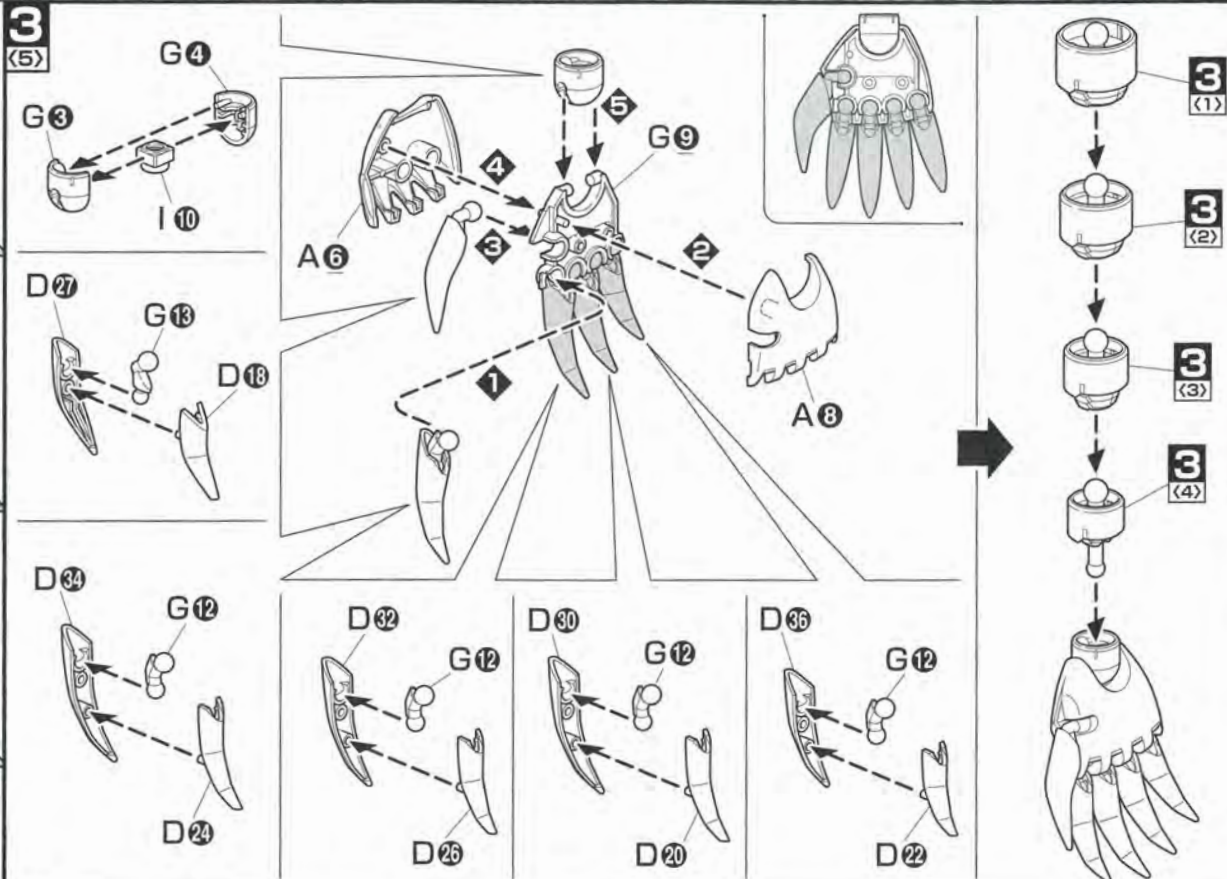
▲両腕、両脚をボディに引き込む機構により、パーツを差し替える事なく水中巡航形態を再現可能。足底部には水中推進用のスクリュウティールを再現。



▲腕の関節部は接合部のメカティールをリアルに表現。5本のアイアンネイルは独立可動。



▲ゴッグの重量感あふれる脚の形状をリアルに再現。各関節部には、防水カバー再現用のゴムパーツを装着。



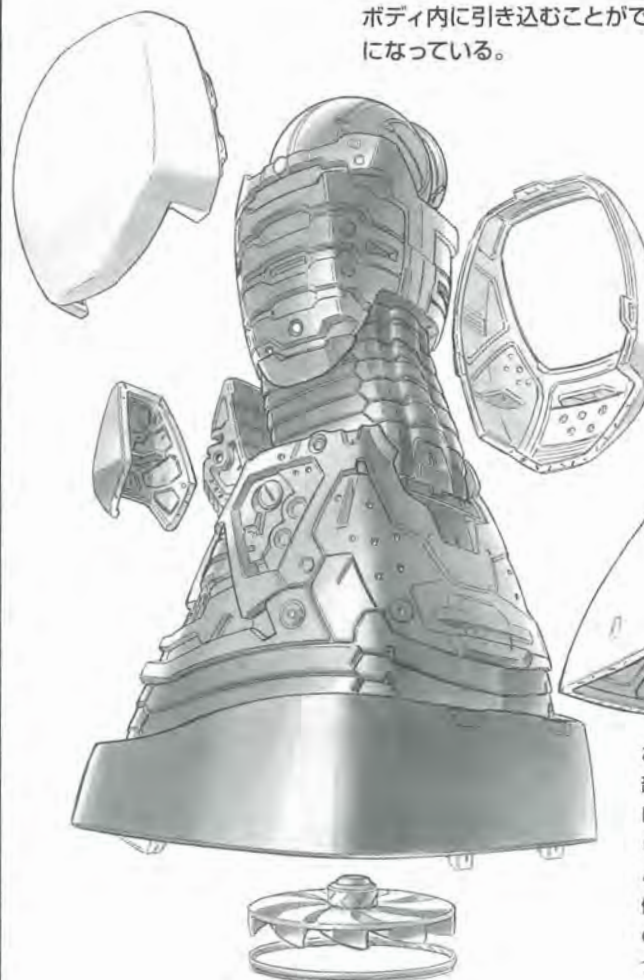
ARM UNIT

ゴッグの腕部は、後に公国軍の水陸両用MSの特徴ともなる環状の装甲に護られた柔軟な可動肢と、クロー状のアイアンネイルによって構成されている。これらは航行時にショルダーアーマー内に引き込まれ、水の抵抗を減免することができる。

ゴッグは量産に移行する際、プロトタイプとは異なる腕部構造を採用した。その構造は、通常型MSのマニピュレーターと違い、自由度の高い複数の関節で構成され、各節のペロウス（ジャバラ）部分を引き込むことで全長を短縮し、より抵抗の少ない航行形態をとれるように採用されたものであった。後にこのフレキシブル・ペロウス・リムは、航行時の抵抗を減らし、逆に能動的に可動させることによって水中での機動に援用することも可能であることが判明した。さらには、各節のアクチュエーターがショックアブソーバーとしても機能するため、例えば、敵の打蹴や投擲兵器を防御したり、受け止めることさえ可能であったという。また、水陸両用MSは、機体運用の問題からオプション兵装の携行が困難であることが想定されたうえ、通常のマニピュレーターに高度な耐圧構造を持たせるのは現実的ではないという判断から、斬撃用武装の代替案として、打突あるいは斬撃に適したクローなどを腕部先端に装備することとなった。近接戦闘時には武装として機能するほか、簡易マニピュレーターとしても機能できるよう、開閉機構も持たされた。結局、運用上は概ね良好な結果が得られたため、特にフレキシブル・ペロウス・リムは後の水陸両用MSには積極的に採用されることとなったのである。

LEG UNIT

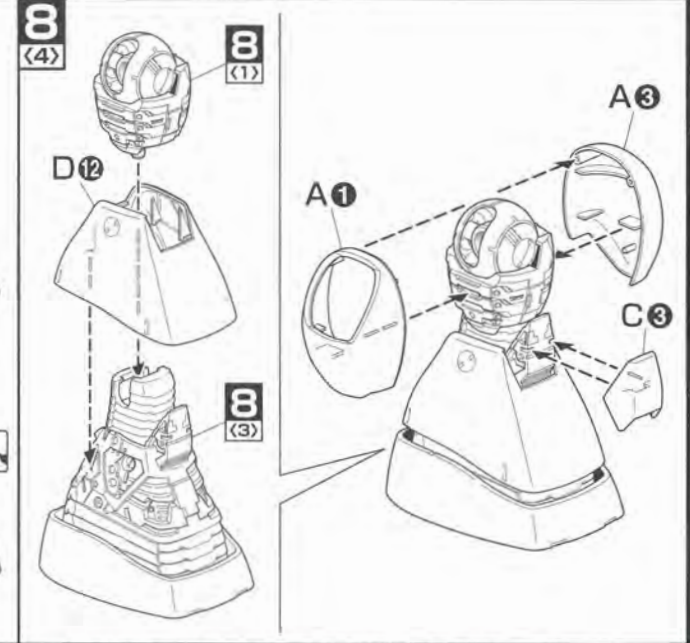
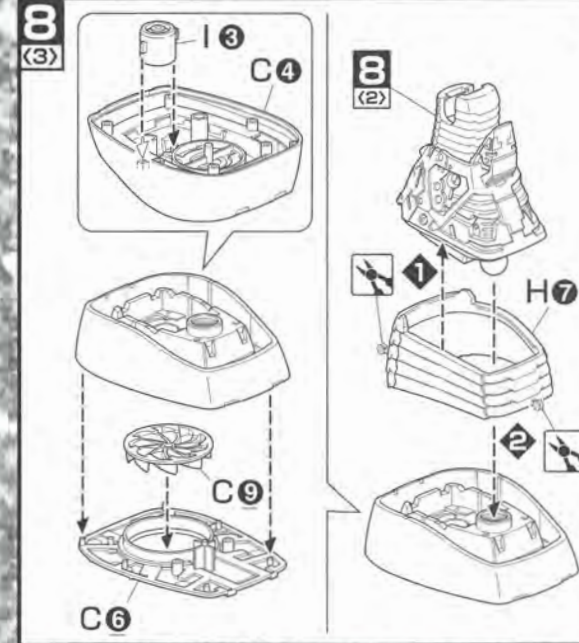
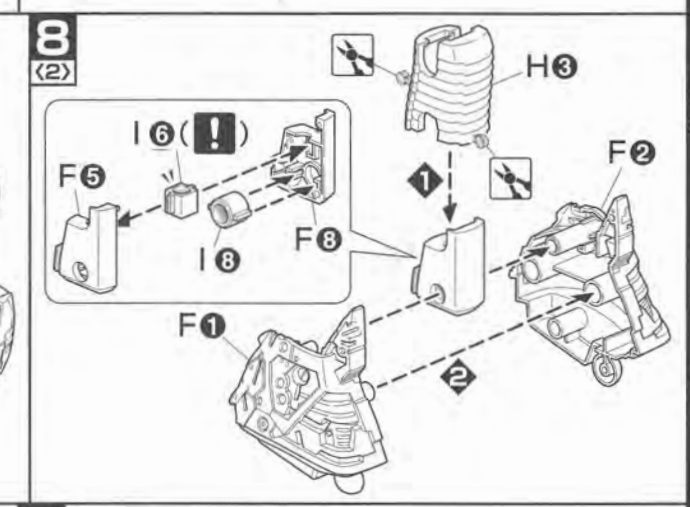
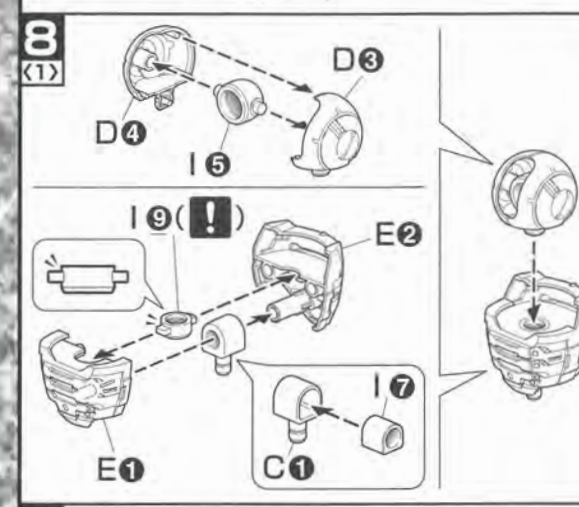
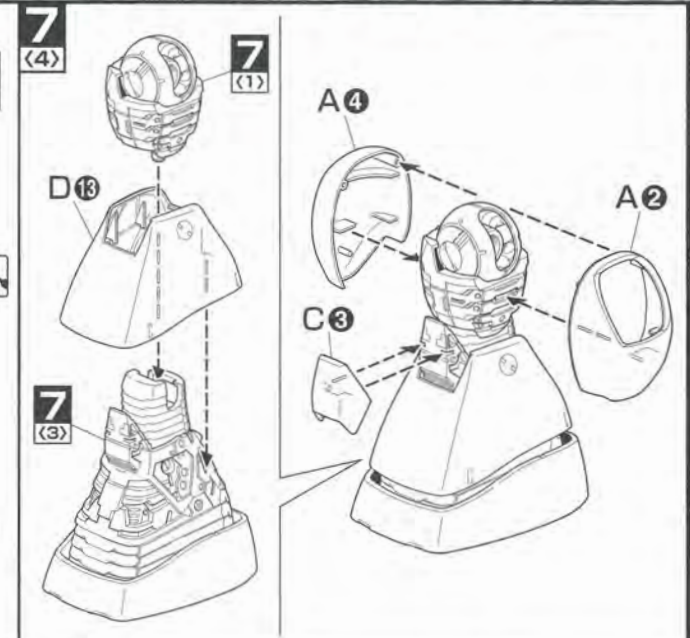
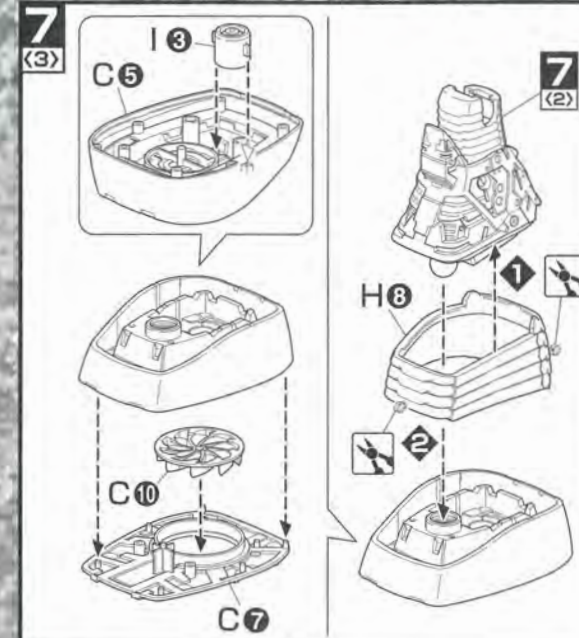
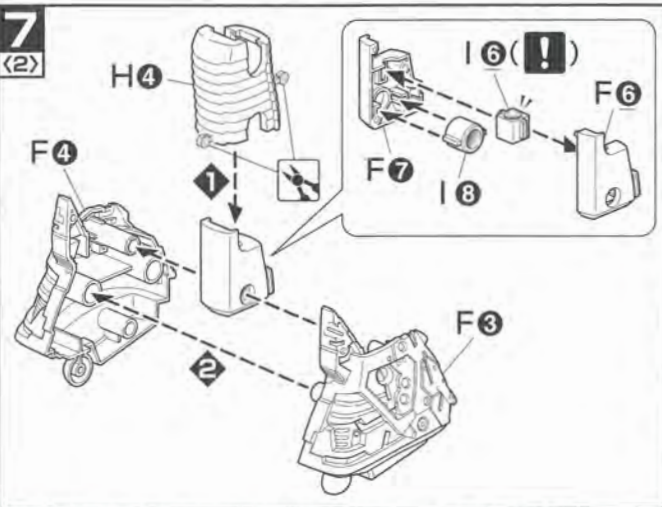
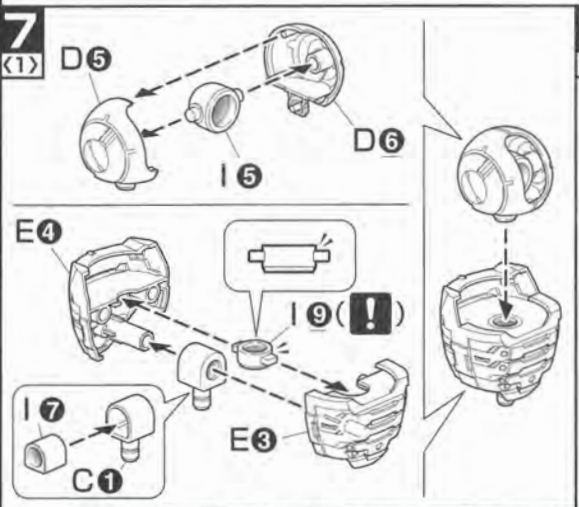
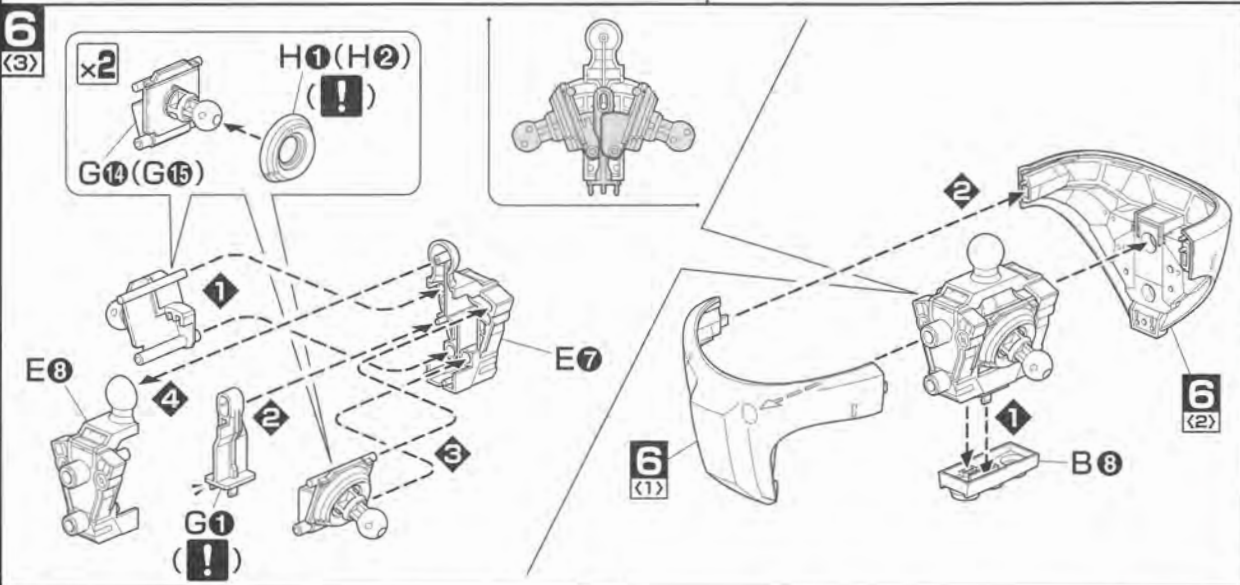
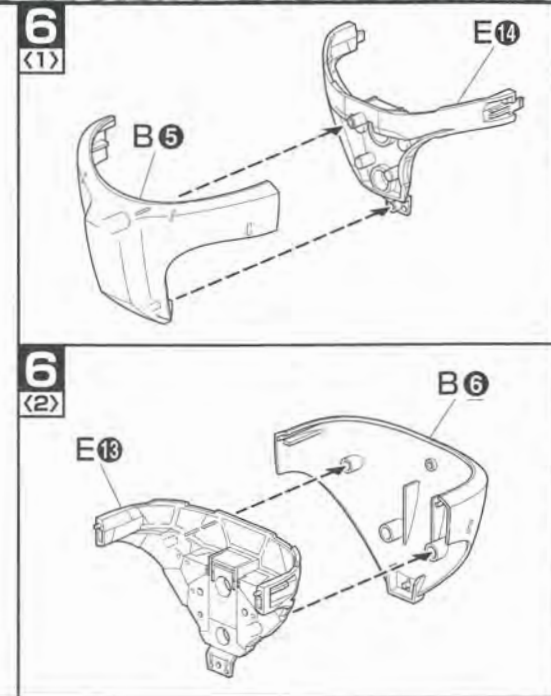
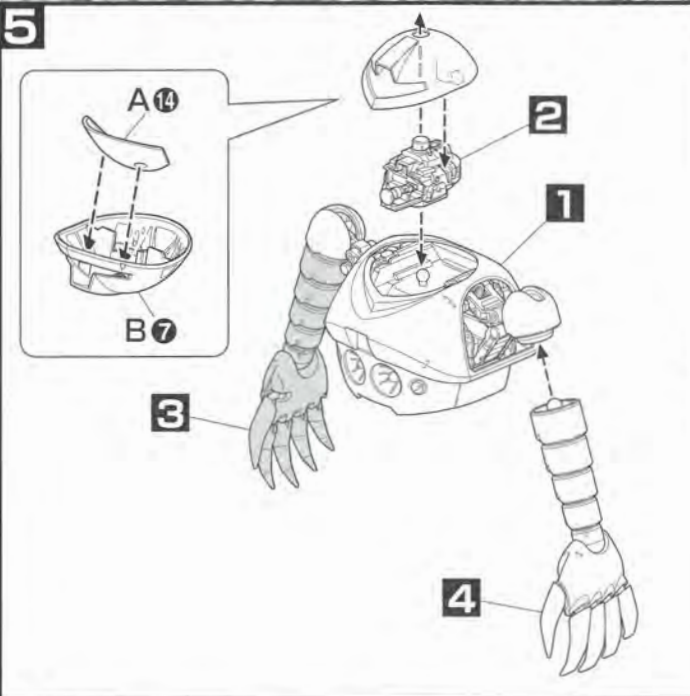
ゴッグの脚部は、歩行脚であると同時に、主要な推進装置でもある。また、航行時の抵抗を減らすため、股関節をボディ内に引き込むことができるようになっている。



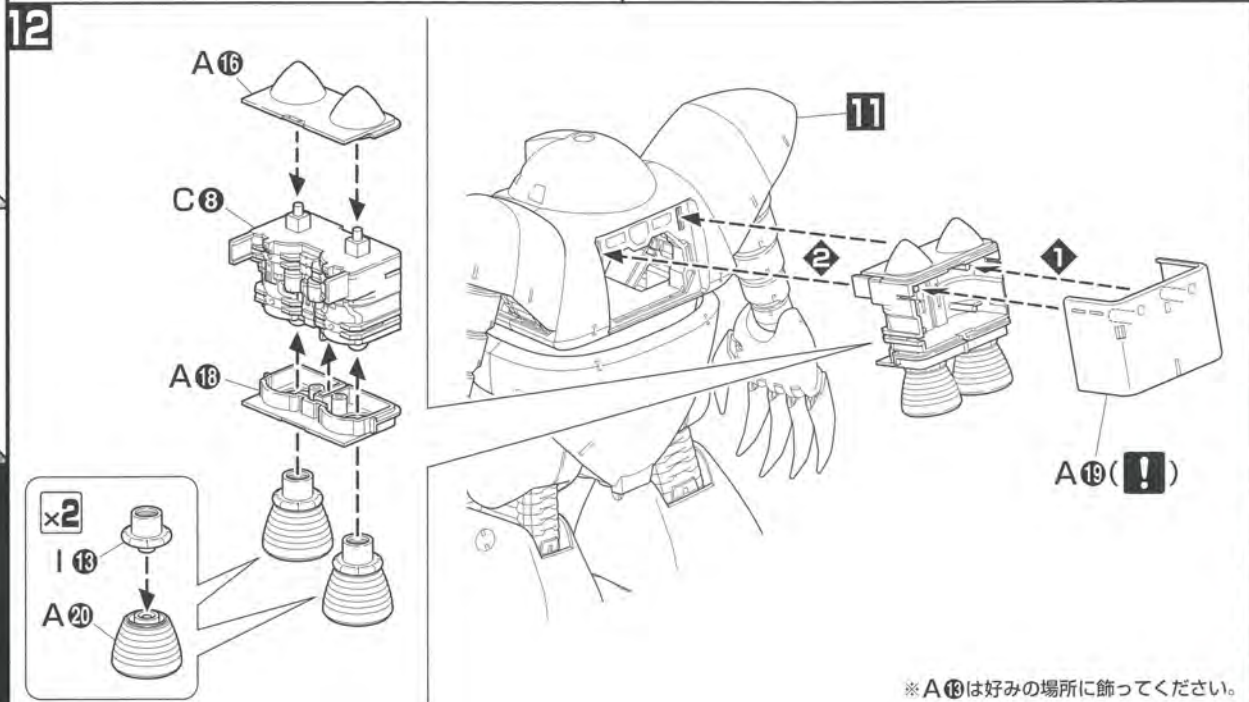
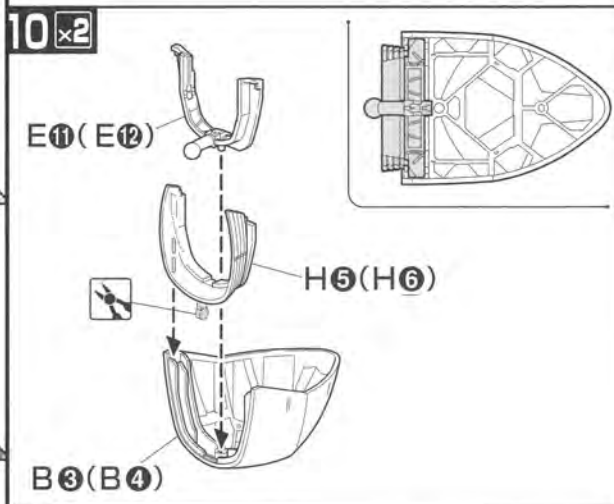
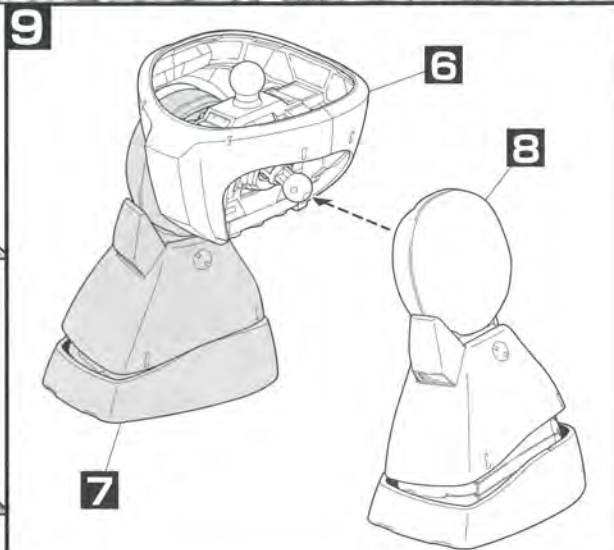
ゴッグの脚部は、基本的には熱核 hidrojet エンジンであり、水中での稼働を前提に設計されているため、いわゆる“歩行”能力は決して高いとは言えない。ただし、自重を移動させるためだけというわけでもなく、それなりに近接戦闘への対応も可能な程度のトルクやレスポンスは確保されている。緊急時には“走行”も可能であるほか、ボディ下面や背部のスラスターを使用すれば、一撃離脱の白兵戦も不可能ではない。

それでも、例えば陸戦においては温度の上昇などに配慮しなければならないし、パイロットは常に“水際”で戦うことを心掛ける必要があることは言うまでもない。かようにゴッグの脚部が“歩行脚”として脆弱であることは紛れもない事実であり、ゴッグの評価が芳しくないのも、おおよそこの構造上の問題に帰結するのである。ところが、ゴッグの脚部が発揮する“移動能力”そのものを考えれば、無論、海に出さえすればではあるが、その行動半径は既存のMSをはるかに上回るものであり、最も広大な範囲を単騎で移動できた初めてのMSであるということもできる。ひいては、脚部にスラスターなどを補助的に装備するのではなく、熱核ジェット/ロケットそのものを内装した初めての機体だと考えれば、後のTMSなどに多用される基礎構造の先鞭をつけた機体なのだと言っても過言ではないだろう。

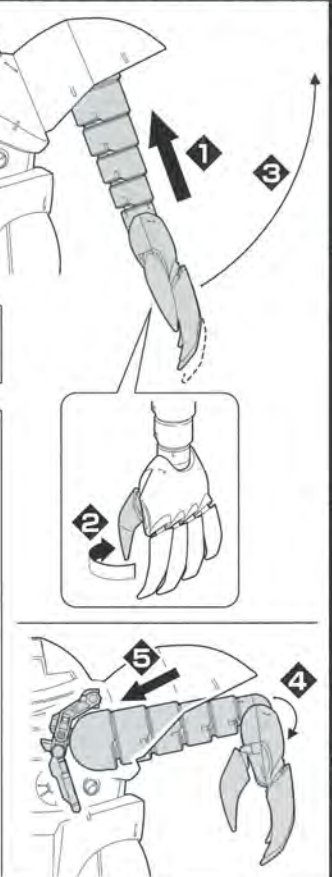
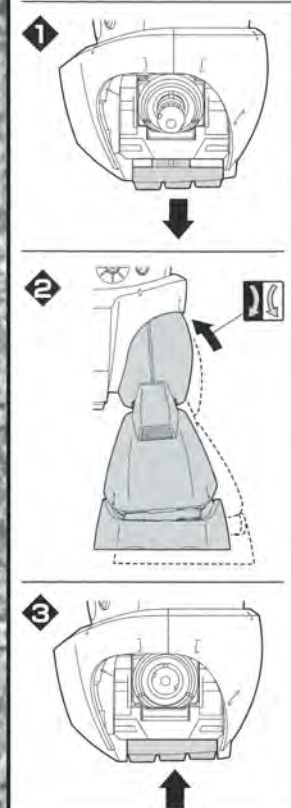
Parts Name
Parts List
Head Unit
Body Unit
Arm Unit
Leg Unit
Final Assemble



Parts Name
Parts List
Head Unit
Body Unit
Arm Unit
Leg Unit
Final Assemble



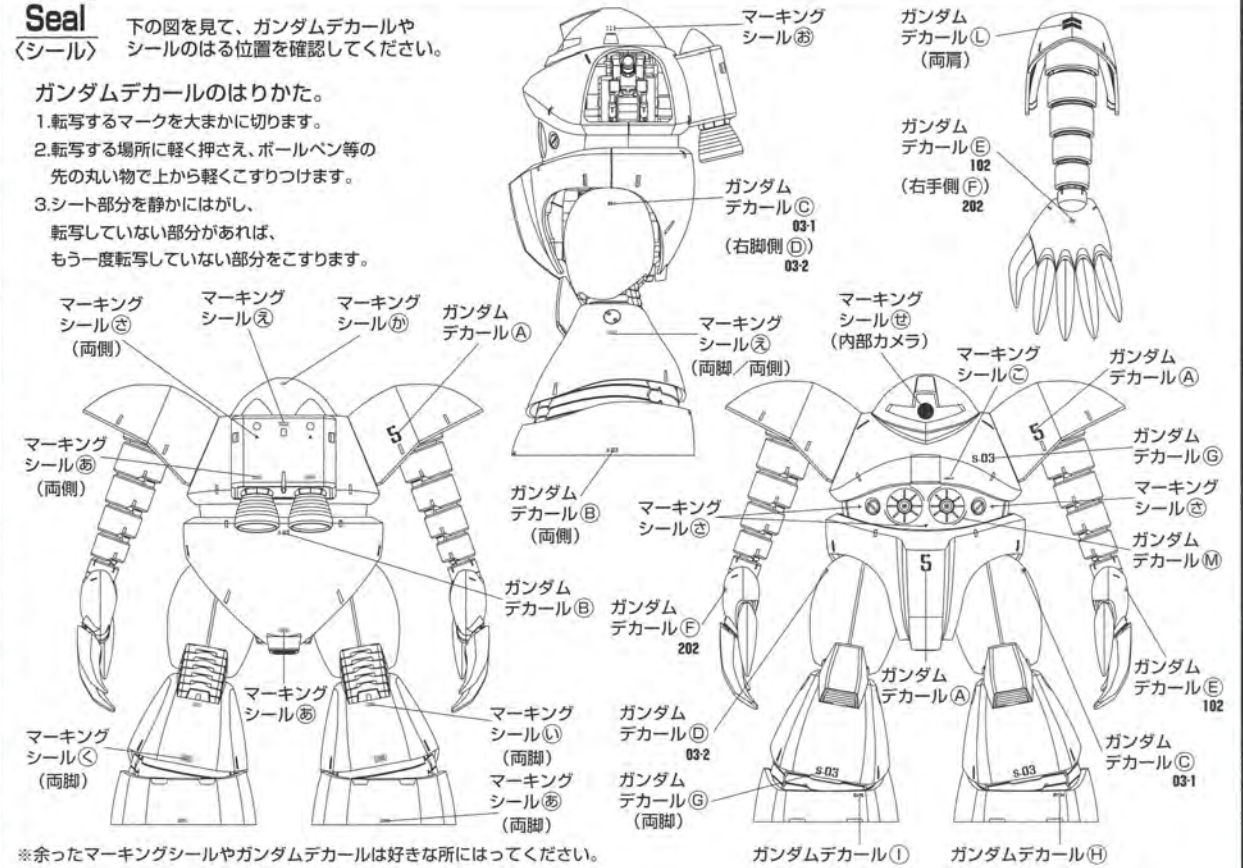
※A19は好みの場所に飾ってください。



Seal

下の図を見て、ガンダムデカールやシールのはり位置を確認してください。

- ガンダムデカールのはりかた。
 1.転写するマークをだまかに切ります。
 2.転写する場所に軽く押さえ、ボールペン等の先の丸い物で上から軽くこすりつけます。
 3.シート部分を静かにはがし、転写していない部分があれば、もう一度転写していない部分をこすります。



※余ったマーキングシールやガンダムデカールは好きな所にはってください。